

二〇二三年度

# 適性検査Ⅰ

## 注意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分間です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号・氏名**を問題用紙と解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

聖徳学園中学校

受験番号				

氏名

① 次の「詩」と「文章」を読み、あとの問題に答えなさい。  
(※の付いている言葉には本文のあとに「注」があります)

〔詩〕

歩きはじめてばかりの坊ぼやは  
歩くことで しあわせ

歌を覚えてたての子どもは  
うたうことで しあわせ

ミシンを習いたての娘むすめは  
ミシンをまわすだけでしあわせ

そんな身近なしあわせを  
忘れがちなおとなたち  
でも こころの傷を  
なおしてくれるのは  
これら 小さな  
小さな しあわせ

(高田敏子「しあわせ」による)

〔文章〕

体の大きな男だった。ボアの付いた紺色のナイロンジャンパーを着ていた。校庭には明かりがないので顔はわからなかったが、なにか怒っているような雰囲気だった。

学校の用務員さんだ、と最初は思った。

真一はあわてて立ち上がり、半ズボンの尻についた砂を払いながら、「すぐ帰ります」と言った。

「逃げんでもええ」

しわがれた低い声が聞こえた瞬間、身がすくんだ。怖かった。目を上げて顔を確かめることもできない。

「さかあがりの練習しよるんか」おとな同士でしゃべるときのように、笑いのない声だった。真一は思わず「ごめんなさい」と答えたが、顎も口もこわばっていて、うまく動かなかった。上目遣いでおそろおそろ顔を見た。知らないひとだった。太い眉毛とギョロツとした目がいっしょにつり上がって、学校で一番おっかない山田先生よりずっと怖そうだった。

「できんのか」と男はつぶけた。怒られる、としか思えなかった。小さくうなずいたつもりだったが、男は声をさらに濁らせて言った。

「どっちな。できるんか、できんのか」

「……できません」

泣きそうになった。こんなに怖いひとに会うのは初めてだった。おとなの男のひとに怒られるのも、初めて。それ以前に、おとなの男のひとと二人きりになったことも、ほとんどない。

真一は赤ん坊の頃に父親を病気で亡くしていた。母一人子一人の暮らしだった。親戚や近所の男のひととは皆、真一に話しかけるときには優しい声をつくってくれた。その理由と、「不憫な子」の意味を真一が知るのは、ずっとあとになってからのことだった。

「怖がらんでええけえ、いっぺんやってみいや」

男は鉄棒に顎をしゃくった。逃げ出したくても、足が震えてしまつて動けない。助けを求めようにも校庭に人影はない。

「おじちゃんが見ちやるけえ、やってみい」

もう一度うながされた。声がほんの少しだけ優しくなったような気がしたが、早くさかあがりをやらないと、また怖くなるかもしれない。

鉄棒につかまった。腕の幅を調節する間もなく、地面を蹴り上げた。

今度もだめだった。腕も脚もくたくたに疲れていたし、男の視線が気になって、いままでの中でも一番ひどい出来だった。

「こりやあ、ぜんぜんおえんもう」

男は、初めて笑った。笑ってもしわがれ声は変わらなかったが、つり上がっていた眉毛や目が人形劇の人形のように急に下がった。

怒られずにすんだ。

ほっとして息をつくとき、怯えた気持ちと入れ替わるように、悔しさと恥ずかしさと、そして悲しさが胸に湧いてきた。

(中略)

「もういっぺん、やってみい」

男が言った。濁った声を、もう怖いとは感じなかった。一度泣いてしまえば、悲しさも恥ずかしさも消えて、残ったのは誰にぶつけていいかわからない悔しさだけだった。

「今度は脚を上げるときに『このやろう！』思うてやってみい。肘をもっと曲げて、脚いうよりヘソを鉄棒につけるつもりで、腕と腹に『くそつたれ！』いうて力を入れるんじや。目もつぶっとけ。そうしたら、できるわい」

真一は鉄棒を強く握りしめた。

もう一度——これで最後。

肘を深く折り曲げ、「このやろう！」と心の中で一声叫んで、

脚を跳ね上げた。ヘソをつける。腕と腹が痛い。目をつぶり、息を詰めて「くそつたれ！」と叫び声を奥歯で噛みしめた。

あと少し。いいところまで来たが、これ以上、尻が上がらない。そのときだった。

尻がフワツと軽くなった。

掌で支えてもらった——と思う間もなく、体の重心が手前に傾き、腰から上が勝手に動いた。世界が逆さに回った。自分でもなにが起きたのかわからないほどあっけなく、そしてきれいに、さかあがりは成功したのだ。

「できたじやろうが」

男は初めて笑った。思ったより遠くにいた。手を伸ばしてしりを支えるには距離がある。ということは自分の力で……いや、しかし、半ズボンの尻には、掌で押し上げてもらった感触がまだ残っていた。

「もういっぺんやってみい。体が忘れんよう、練習するんじや」言われたとおり、何度も練習した。ずっと成功がつづいた。尻が鉄棒を越えるときに掌に支えられる、それも同じ。だが、成功して脚を地面についたあと、すぐに目を開けて確かめると、男はいつも鉄棒から離れたところで腕組みをして立っているのだっ

た。

何度目だったろうか。初めて、掌に支えられることなくさかあがりに成功した。

「やったあ！」

思わず声をあげて男の姿を探した。

どこにもいなかった。

神様だ、と思った。へさかあがりの神様〈が助けてくれたのだ、と信じた。

それを確かめてみたくて、もう一度やってみた。だいじょうぶ。何度も繰り返した。できる。「このやろう！」と「くそつたれ！」がなくても、世界は気持ちいいぐらい簡単に逆さに回ってくれる。

なぜだろう、それは初めて体験したはずの感覚なのに、ずうつと昔に味わった心地よさが蘇よみがえったような気がしてならなかった。

(重松清「さかあがりの神様」による)

〔注〕

※不憫な

—— かわいいそうな。

〔問題 1〕

〔詩〕の「小さな しあわせ」とは、具体的に何を指すでしょうか。三つそれぞれ二十字以内で説明しなさい。

〔問題 2〕

〔詩〕で中心となっている作者の考え方をふまえると〔文章〕の真一にとっての「小さな しあわせ」はどんなことだと言えるでしょうか。百字以内で、「ししたこと、・・・ができるようになったこと。」という形にまとめなさい。

〔問題 3〕

〔詩〕と〔文章〕を読んで、あなたが何かをできるようになったときに感じた「小さな しあわせ」について三百五十文字以上四百字以内で具体的に書きなさい。

〈きまり〉

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。
- 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書きます。
- 。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。

